

tab

No.
23

2
0
1
0
/
07
/
15

後藤美和子／長尾高弘／野村龍
石川和広／福島敦子／秋川久紫
タケイ・リエ／倉田良成

榊 II *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：手紙／01
野村龍：舞々／03
長尾高弘：出していない手紙／04
福島敦子：ホーム／06
タケイ・リエ：森／08
秋川久紫：無為の祭典／09
石川和広：あると／10
倉田良成：観音崎へ行く道・西脇詩碑頌——水をさがして5／13

文

倉田良成：随筆岸谷巷説／16

あとがき集／18

画：和田彰

〒第23号／2010年7月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

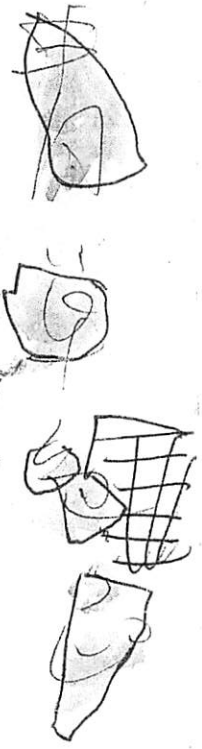
〒230-0078横浜市鶴見区岸谷4-25-25鶴見岸谷ハウス201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp

20/10



19
in ex.celsis
20/10



in ex.celsis *Am* 2010

後藤美和子

手紙

エルドラドで受け取ってください
色鉛筆で書きました

薄い青空

小さな手紙

きれいな字で書きました

もしかしたら

笑ったあとで結んでください

言葉じりを長く引き

けれども外は荒れていた

成功するはずのダイビングで

雲の端にひっかかり

足を躍らせ靴を散らし

気がつけば

私は故郷の岸に送られていた

白い羽音に囲まれて

空色の手紙の友だちよ

おどけよう

字体を崩そう

何かが私に当たったのです

あるいは黄色い蝶だったか

私がおかをする前に

おおボタンボタン

みんなみんなみんなどこだ

と、探すふりをして

私はここに隠れよう

たったひとりの友だちよ

私はもうあんな字は書かないよ

踊る字だけだ

あるいは肩に荷を負って

川を下れたら永遠によかった

(皆既蝕五三)

野村龍

舞々

沈丁花の旋律が

螺旋階段から滴り落ちる

黄色いQの

泡のような翼のかたまりと

切り取られた

薄桃色の歌とが弾け飛ぶ

傾いたプラネタリウムは

噴水の香りのなかに巧みに隠され

しっとりとした亡霊達が

壊れた蝸牛の心と 絶え間なくお喋りをする

葡萄から溢れる子守唄は

腐り始めた太陽系を 輝きのなかで眠らせる

射抜かれたひとつの瞳

枕元に置かれた 水と一粒の種

(暗闇はたちまち溶けていく)

薬指の頭くらいに圧縮された

カトリアの半透明の脳

出してない手紙

こんにちは、昔の人たち。

もうこの世にはいらっしやらない皆さんに、
挨拶をしたくて筆をとりました。

筆をとりましたといっても、それはたとえばで、
本当は筆なんか持っていないませんが、
話すとき長くなりますので、

筆を持っているというつもりで、
聞いてください。

それでは本題に入りますが、
皆さんは、未来に夢をお持ちでしたでしょうか。

なぜ、こんなことを言い出したかというと、
皆さんから見ると、今は未来になるわけですが、
全然いいとは思えないのですよ。

確かに、自分が小さい頃でも、
こんな風に筆を持たないで手紙を書くことなんて、
想像も付かないことでした。

筆を持つよりは楽なんですよ。
こういうのを便利になったというのかもしれない。
でも、

代わりになくなっていくたものがいっぱいあって、
胸のあたりがすうすうするんですよね。

そんなことを言っているのは贅沢なのかなあ。
でも、皆さんが未来の私たちのために、

と思って残して下さったものも、
もう何も残っていないんですよ。

正直言って、私たちは皆さんがいらっしやったことさえ、

ほとんど覚えていないんですよね。

昔の人たちは、そんなことを言われても、

笑ってそれでいいんだ、って言ってくれるのかなあ。

それをちょっと聞いてみたかったですよ。

でも、やめておきます。

実は、

ふだんは皆さんではなく、

未来の人たちに向かって書いているんですよ。

この手紙は、

念のため、

彼らのために取っておくことにします。

それではまた。

どうかお元気で。

ホーム

帰りたいんよ

ちよつと みさこに電話してくれんかいな

わたし 家に帰りたいんよ

あそこに山が見えるだろ

あの山の向こうに家があるんよ

そこに帰りたいんよ

心配やし ほつたらかしにしてあるし

用心悪いし

息子？

息子もおるけんどな 息子はあかんわ 娘でないと

ほなけん ちよつとあんた みさこに電話してくれんかいな

むかえに来てつて言うてみて

わたし 帰りたいんよ

もう晩御飯の用意しよん？ わたしの分も？

ほなけん 今日はまたここに泊らんならんのか？

ほうで：

ほなけんどな わたし 帰りたいんよ

みさこがお母さんはここにおってほしいつて言うたん？

なんぼみさこが言うてもな 帰りたいんよ

みさこの気持ちよりわたしの気持ちじゃわ

こつておむかえがないと帰れんの？

勝手に帰つたらあかんの？ 難儀やなあ

あそこ あそこに山が見えるだろ

あの山の向こうにな 帰りたいんよ

あの山の向こうにな 家があるんよ 畑もあるんよ

心配やしな

嫁？

嫁もおるけんどな ほんなんあかんわ 娘でないと

ほなけん ちよつとだけでええけん みさこに電話して

ええっ！

さつき 電話したん？

みさこがここにおつてつて言うたん？

ほうだったかいな 忘れたもん 知らんもん

ほんなん忘れた：

わたし 帰りたいんよ

見渡す限り 桃の花が咲いてな いちめに菜の花が咲いてな

お遍路が来るんよ

ちりんちりん鈴の音がしたらな

お遍路が家の中に入って来てしまうから

鍵を閉めに帰らな

ほなけん 帰りたいんよ

あの山のな あの山の向こうに家があるんよ

あの山の向こうに帰らなあかんのよ

あの山の向こうにな わたしのな

住みかがあるんよ

ほんとうの家があるんよ

帰りたいんよ

帰らなあかんのよ

はよむかえに来て！つて伝えてだ なあ

待つとるけんな

森

わたしたちのめぐる土地は水かさを増して
ぬるま湯のような冷めかたで今ここに存在
することの暴力的な血のおいをしたたら
せ飼育されるうさぎの肉のような私の二の
腕がこっそりと裏切られてゆくのを見てる
泥沼のさなかを泳いだり溺れたりするひと
のことをたくさんみてきたんだ至近距離が
つくった擦過傷は皮膚をかるくめくってゆ
くそのうらがわに書きつけたまぶたの焼け
焦げてゆく匂いを今からどうしてやろう？
もっと悪くなつていいのなら胸をきりひら
いてゆくから獣の生肉を盗んでほしいのよ
知らないうちに死なない程度に食べている
塊肉が古くなつてくずれはじめのをみて
も実感がなかった褪せてるわたしの顔色に
夜が走ってやって来てもルーティンに囲ま
れていてそのなかで息していると了解して
移動してもこんなにすばやく酸化するなん
てたとえ凍らせておいて塩を撒いたとして
も血の一滴だつて流れない森の土地だった
背後にあとずさつてゆく樹々の飛沫がみど
りの匂いをさせるから指先から離れてゆく
痺れてゆく水の溜まった膝から抜かれてゆ
く情愛がとびはねては尾をからませてこの
土地の匂いをしずかにまき散らしてゆくよ

無為の祭典

やがて永い嵐の季節が始まり、いつしか平行棒の上を器用に歩くことを覚え
た。あるいは黄葉が舞い落ち、火吹き男が通り過ぎて行くのを、窓を媒介す
ることなく、ただ感応によって眺めることを習慣付けるようになっていった。

肘掛け椅子の上を漂う一片の白い綿毛。その危うさを敢然と見殺しにして、
堅い岩盤に纏わり付く叙情の気配を一枚ずつ丁寧に引き剥がしてゆく。まだ、
舞踏は始まらない。開かれたパラソルを宥めるようにして、美に厭いた獅子
の群れが彼方の平原を重たい足どりで移動していく。

つまるところ、誰かが誰かを欺くのは決まって無垢な稻妻が頼りない光を彎
曲させる時刻なのだが、ほとんどの人はそんなことにまるで関心を示さない。
そうして、多くの慟哭や断絶は揺るぎなく余りに正当過ぎるから、いつだっ
て孔雀の羽の過剰な彩色の裡にかき消されてしまう。

さて。

果てのない反対衝動を持って余しながら、今、ここで無辺に解き放った夜を戯
れに抱き寄せ、あるいは笑顔を見せつつその背中に刃を突き立てたところで、
恐らく事態は何も変わらず、むしろ葛藤への誘いを強めるだけに違いない。

石川和広

あと

よく心細くなる

細くなるように

心は出来ているのか知らないが

感じられるところではある

息がしにくくなってどうにもならないって思うのだけど

息をゆっくり深くすれば

幾分かはその細さはマシになる

道であるかわからない

その道をひろいところに置いてゆっくりと息をしながら

眺めるように自分のからだを感じながら

自分のものでありながら眺める気持ちで風景に置くのである

道端で、台所で心細くなると

水を飲んだりして息をついて、ある広さの中に

自分を置くのである 感じられる時間や空間の

広がりが変わるように

苦しみを耐えうるものに置き換えるのであり

置き換えられる

人は

人という形で、どうしても胸が苦しくなるような

事柄そのものに深く問われる

その深刻さが自分を殺さないように

どこかで命がちぢめられていないか

この暮しは今あるようにあるとして
手のひらを握ったり開いたり
肩の力を抜くのである

だんだん間合いがとれてきて
言葉の中に、言葉が作り出す檻に
ことばという顔をした

その実、絶望や涙に不意におそわれていた自分に気づくのである
おのずから発した正体不明の涙におぼれていたのである

ようやくあなたの顔がみえてきて
これまでということ
これからということが
いまを始まりとして

いまは、様々なものが
過ぎ去りまた来る場所として
生き返ってきて
明日は何をしよう
そうだ
いま詩を書いてみてもいい

不安に勝とうとしても負けようとしても
不毛だから
いろいろなものを見に行こうと
見て、行なったら
そこからかんがえられる
感じるし
また動くし

だから問題はあるのだけど問題にうずくまっているのも

なんだし

で、鳥の声が最近きれいだなあ

それから

スヌーピーの言葉の書いてあるカレンダーがみえてきたり

人を愛することを

平生のこととして

きらめきとして

幾分か憂鬱を残したまま

自分の意志を次の瞬間へ、そして

その彼方の方向へとさしむけることができる時も

あると

いつもではないが

あると

倉田良成

観音崎へ行く道・西脇詩碑頌 — 水をさがして5

昼の食事をともにした

柚木の里に棲む哲人と

カレー・プレートの辛さに陶然とする、店の名は

ニルヴァーナ

横浜に雲は騰がり

弥騰いがり

レストランから出ぎわ、

香炉のような壺にみたされた

香木の実の、皮の、匂いの塵を嚼む

門をあければ夏の山野がひろがって

われわれはすでに京急線の人なのだ

ここは黄金町

叔父が簡易宿泊所で身罷った街

それから野比まで行けば

多くの詩人が通った宿痾の施設のあるところ

戸部と言われ、追浜と逐われる

弥雲は騰がり

白雲は騰がり

半島の先を洗ふ白濤が騒いでゐる

馬堀海岸から走水沿いにバスで行く

群れ飛ぶのは、あれはカモメではないのです

非常に高いところで神の笛を吹くトンビ、また

筆築みたいに唸るカラスのたぐい、

つばくらの和琴、peaceと啼く小鳥

水道の上空で

一斉に混線して、こぐらかつて、美しい

バスを降りれば海流烈しく

岩礁ははや八月の逆光を思い起こさせる

われわれはすでに燈台へ行く道の人である

ヤツデ、ヤブツバキ、ガクアジサイの繁茂する

断崖つづきにとつじよ開闢する巨岩窟

行基の刻したその生まれ変わりの大十一面観音が

いんいんとむなしく果てのない光を発しつづける

水道のうえ

菅畳八重、皮畳八重、縮畳八重を波の上に敷いて

相模野の

野焼きの中でほのかたらいしひとの

ミクシだけが七日をへて漂着した

いまは

海と

燈台だけが苦痛なほど透明にかがやいている

ピヒョークサイ!

の詩人の碑のところで、柚木の哲人

無能無才の一筋につながる不肖わたくし

ともに携帯画面リリパットの小人となる

人の背に乗る「海の老人」が飲む木の実の酒や

キリストの伝記を書いたルナンといふ学者、

また、彼が少年の時みた「麻たたき」など

実にいろいろな人間がいろいろなことを言つて

懐うたび

燈台へ行く道の

植物は繁茂し、鳥は歌いさえずり

垂迹神はむしろ本地仏となつて半島のゆたかさの顔かんはせでさんざめく

海は穏やかにとどろき

雲騰がり

弥白雲は騰がり

独身主義の人魚が汐をあげる沖合には

ニルヴァーナがある

あのとぎ

横浜のインド・レストランの名は

涅槃ということですねと花を向けたのだ

騰がる雲を背にし

哲人

香木を嚼みながら

「楽園という意味もあるんだな」

と微笑せり

随筆岸谷巷説

私の住するところの横浜は鶴見区の西端に近い地区に、岸谷という町がある。キシタニではなくキシヤと読む。

この音と文字づらといかなる連関があるのか、音と表意文字とのあいだでいかなる合理化、摺り合わせがおこなわれたのかはさておき、なるほど読んで字の如くもとは海に迫った丘陵地帯で、海側には崖であり崖であり、内に向かつては深い入江ないし谷をのんでいたのであることは、町を少し歩くだけで了得されるのである。

いまはすっかり廃れてしまったかの観があるが、岸谷の中心はバス通り沿いに展開する商店街である。鳥瞰すると生麦から生見尾の大踏切を渡ってきた（もとは水脈である）中央通りとも言うべきラインが、浄土宗安養寺門前に垂直に突き当たつてから右に折れ、金光教岸谷教会前から真言宗竜泉寺を右にかすめるように見て、信号のある丁字路を左に折れる。

そこから両側に丘陵ないし勾配を意識しながらほぼ北西に直進し、魚商「魚徳」のポイントでまた丁字をなす。右へ行けばやがて総持寺の裏手へ出る大勾配、バスとともに左へ進めば第二京浜国道の切り通し（これは国道工事のさいに開削された昭和のものである）付近へと抜けてゆく。

この裏手に、竜泉寺脇の下の庚申塚から国道切り通しに至る上の庚申塚までの縄手路がかつて存在した形跡があり、それはいまま細々と利用されている。

大雑把に言つて、この町は丁字路と三叉路と歪んだ四つ辻、また五叉路などから成つていると言つてよい。これだけ見てもこの町の区劃が、近代の市街地計画に沿ったものでないことは明らかであろう。

いっぽう中央通りに目を向ければ、この総

延長数百メートルに満たない「商店街」に、南洋の戦場跡によく見る、朽ちた戦車や座礁した軍艦さながらの姿で、パン屋や牛乳屋、旅館風のしもた屋、スナック跡などが、蔦に絡まれていたりいちめんに錆をふいていたり倒れかけたりして、皆一様に、歳月のもたらす残酷な意味をうちかたむいて沈思するといった恰好である。

町には新しく開店する店もあるが、それを上回る速度で閉店する店舗の数がある。いままで見てきたように、丁字路の多いところへ持つてきて、その角々の町の顔とも言うべきコーナーで店が仕舞つてゆくのだ。こういうのは町の生態としてある意味、単なる閉店という事態以上によるしからざるものがあると思うのだが、どうか。

不良どもがたむろすことさえないコンビニエンスストアの静けさというものを考えてみたりする。当然住民のほうも、徐々に新しく移り住んでくる若い世代のことをさして措いておけば、圧倒的に老人の町という色合いが濃厚となる。

ことしは隣町生麦の奇祭「じゃもかも祭」のにぎわいを目にする機会を持たなかった。これは本来水の悪い鶴見川流域特有の水乞いの祭と私は睨んでいる。だがこんなにも気候の変わってしまった昨今の本朝では、仮に水乞いの祭だとして、その水が主題の祭の意義は大きく変化して、金槐將軍の、

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王
雨やめたまへ

という歌に相応しいものになりつつある。

「じゃもかも祭」は生麦の祭だが、それを管掌するのは岸谷杉山神社の宮司である。それがことしも変わらずに祭司の職責をふさいだ

ようだ。しかるに近年この祭にはますます勢いがなくなっているというのは、十年前からここで生活することになった私の実感である。氏子の旧い家の年若いものを見ないか、あるいは新住民の幼すぎる子どもしかいなくなっている。あとは少数の壮年者と、幹事といった役どころである少なうはない数の老人たち……。

私が見た去年の祭では、遊行し、家々を祓い祝福して回る蛇体の動きに、それまでに見てきたような神気や靈性が、あまり感じられなかった。ことしは願わくば私の見立てを裏切るものであってほしい。これは、見ていないのでよくは分からないけれど

そしてまた、年ごとに町の通りを歩く老人の顔が入れ替わってゆくという現実がある。昨日まで見た顔が、今日はもうあとかたもない。このあいだ、腰が曲がらないので、自動販売機の缶コーヒーを取るのを助けて欲しいと、私に向かつて呟いた老人を再びこの町で見ない。まるで町も人も、昭和という御代の絶滅を、息をひそめて待っているといったふぜいである。

だがしかし、これをひるがえって推量すれば、開発の手がこの地に大々的に入るまでにはまだだいたいづ間があるというか猶予期間があるだろうことに思い当たる。

おおむね町は静かである。同じ横浜でも交通量の多い六角橋からここに移ってきた当初夜の静けさはわれわれ家族を圧倒するばかりの巨大さで、かえって目が冴え渡って眠れない幾夜かがつづいた。

岸谷は大きな譬えでいえば七つの丘を持つローマと同じく、いくつかの丘と必然的に存在する谷間とから成っていて、かつて町の中心を流れていた水脈が存在する点でもローマにおけるテヴェレ川と軌を一にする。

竜泉寺の丘と、安養寺のというよりは岸谷杉山神社の丘が、主たる緑陰を形成するほかは、白っぽい住宅地が拡がるのだが、中には土着の樹木であるタブノキを庭木にする家もあり、植え込みもわりあい豊富なので都心などで感じる渴いたような気持ちにはなりにく

い。ゲッケイジュやオリーブなどを庭木にしている家もみとめられる。

だがこの地で何より魅力的なのは竜泉寺裏手の藪である。

竜泉寺の塀に沿って、手前はツユクサ、ヤブカラシ、ササなどの小藪、塀の向こうには森があつて化け物の大きさのタブノキやユリノキ、クスノキ、シロダモ、マダケなどがおどろをなして生え惚けている。人の手首ほどの太さの藤蔓やクズが葛藤の原義そのままに狂おしいまでにもつれあい、ねじくれたまま高い枝からぶらさがっている。それらが夏には涼しい蔭となつて脇の階段を行き来する人間に知らぬ間の愉楽をもたらすのである。

手前の小藪はいま、十葉ともいうドクダミの花が盛りである。それが中心となつて繁茂する植物群落をつぶさに見ると、やがてそこに動き回る微細な生き物の気配が感じ取れてくる。

アリのたぐいはむろんだが、じっと動かぬ甲虫、精密模型にも似た微小なカマキリはやはり小さな鎌を振り立てる。密林のなかの大樹冠にも似たアザミから、霧たちのぼるように羽虫の飛び交いや地蜂のホバリングがみとめられ、気がつけばあちこちにうすぎぬのように張られた蜘蛛の巣に、それぞれの国を統治する小君主さながらの若い女郎蜘蛛が、それぞれその巣の中心に舞踏家のような高雅な姿勢で納まっている。

そして日が翳り、夜。動き回る生き物は影を潜めて、能楽の地謡のひびきで地虫が一斉にうたうなか、東の海のほうから月が上がり、と、金銀の花弁のスイカズラが高く匂いだす。その香りは王妃の夜着の香だ。

風が渡ると森のすべての木々がざわめく。塀の破れ目からその森を覗く。幽かに耀くものや風の渡る音以外のざわめき、遠く歌っている声が聞こえてくるとき、そっと肩を押すものがある。森に棲む妖精を信じているわけではないが、夜は楽し。

2010/06/25

confidence

マイヤーリングを題材にした映画を3本まとめて見てみたが、やつぱりピエール・ヴァネック版が一番好きだ。シャルル・ボワイエやオマー・シャリフは鹿を撃つように愛人を銃で撃つのだが、ヴァネック版ではその辺があいまいで、息絶えたマリィア・ヴェツエラの横でルドルフが添い寝するように死んでいくさまが美しい。父フランク・ヨーゼフ皇帝に「お前は何者でもない、お前は無だ」と罵倒され、立っついたらないほどの衝撃を受けての決断であることも、悲恋や政治を理由にするより、私にはリアリティがあった。(後藤)

中村勘三郎の今年のコクーン歌舞伎は佐倉義民伝。江戸時代の佐倉藩で重税に苦しむ農民のために、公津村名主木内宗吾が將軍に窮状を直訴したが、直訴は天下の御法度であるために、宗吾は妻子ともども殺されるという話である。芝居の中の殿様は、世間知らずのぼんぼんで、みなによい顔をしたがるが、無責任な発言のために結局二進も三進もいかななくなるという設定。まるで前の総理大臣である。とすると、木内宗吾は沖繩県知事か？ とところが、農民が苦しんでいるのは、二割増しとなった年貢なのである。とすると、殿様は消費税倍増をぶち上げた現総理か？ 今の世の木内宗吾はどこにいる？ 成仏しないでたたつてやると宗吾が叫ぶラストは感動的で、客席は総立ち、そのまま国会議事堂にデモ行進か、というぐらいの勢いだったが、みんなおとなしく帰りました。(長尾)

認知症だけにはなりたくないと言っている。認知症だと知るともうあかんあといふふうな顔をされる。だけど認知症になっ

いいこともある。認知症という病は、死に対する恐怖心や諦念さえもすつとばしてくれる。そんな思いは持つ必要ないんだよ。今、今、この瞬間を生きればいいと教えてくれる。さつき起こったことは過去。明日のことも思い悩むことはない。今、今のこの気持ちを大切に生きればそれでいいんだよとあつけらかんと教えてくれる。(福島)

今、日本初の女性文化勲章受章者である日本画家・上村松園の生涯に思いを馳せ、様々な文献にあたっているのだが、自分は美術雑誌の編集長時代にある対談の企画でその息子の上村松篁と多少の接点を持ったことがある。今思えば、あの頃、せっかくあのような機会に恵まれたのだから、松園の絵や生活について、直接松篁に話しを聞いてみれば良かったと思う。宮尾登美子の『序の舞』では、松園が(松篁の父とされる)最初の師・鈴木松年だけでなく、三番目の師・竹内栖鳳とも情を通じていた場面が描かれている。もう随分前に京都市美術館で「栖鳳・松園 本画と下絵」展(1994年)を観た際、十一歳しか歳の離れていない師と弟子との間に、果たして男女関係は無かったのか？ とふと考えたことがあったが、宮尾にあつさりそれを肯定されてみると、強い意志と品格に貫かれた閨秀画家・上村松園の数々の絵の中に息づく別の何かが見えて来るような気がしてくる。(秋川)

最近少し暑くなってきた。うれしいことはタバコの本数が減ったことで、困ったこともいくつもあります。認知行動療法の勉強をしたりして、自分の中の不安や怖れと付き合う方法を考えています。(石川)

身体の移動はつまりテリトリーからの移動であってそれによって人は救われることがきつとある。現実と幻想の間を行き来することで生きのびる、ということが本当にあるのかもしれない。(タケイ)

府中に引越しました。府中は辺境ですが、大都会代々木(12年暮らしました!)と比べても、府中なりの良さがあるものです。なぜ府中に引き籠もったかという点、答えは簡単、府中は、僕が生まれ、7年を過ごした街であるからです(僕の人生は、最後までクレシェンドですから、この引越しが、「懐古趣味」や、「終の棲家」などであることは決してありません)。また、府中から僕の職場まで電車で10分、と言う大きな理由もあります。終業して暫く後には自分の部屋におり、明朝の8時過ぎに起床しても、遅刻することはありません。独りで過ごす時間が充分に持てる訳です。その間に、本を読んだり、ぼーっとしたり、部屋を掃除したりすることが出来ます。これは、とても大事なことだと思います。それにしても、代々木のアパルトマンと、府中のアパルトマンとの家賃が、同じ四万五千円とは、いったいどういうことなのでしょう?(代々木のアパルトマンが「歩いて新宿に出られるコンクリートの空間」だったのに対し、府中のそれは、エアコン・シャワー完備の「ひとが住むための部屋」だからなのでしょうか。)(野村)

いま、もやもやさまーずと並んで最も楽しいみな番組、NHK名曲探偵アマデウスで、フォーレのRequiemの巻を見た。

ソプラノ斉唱がin excelsis(高きところ)と歌うところが、全曲中最高音域だと解説で聞いてトリハダがたった。(和田)

長尾高弘さんの感化ではないけれど、これまであまり食する習慣がなかった果物を買ってきて、妻と分け合ってたが、食べるようになった。近ごろの猛暑ともいえる空の下で、つめたく冷やしておいたオレンジや桃などにかぶりつくことは、官能的なまでの体験である。たしか法華経か華嚴経などの仏典にも、食べ物とも飲み物ともいえない、この世ならざるものが出ていたが、それはこういうことだったのか。

(倉田)